堺　の　線　香

41期

Ⅰ　テーマ設定の理由

日常仏事等に使う線香には、緑・茶色の物や字の出る色々な線香がある。火をつけると炎を出さず煙を出し静かに燃えていくのは、どんな物を原料にして、どのように作られているのだろうか。機械化の進んだ今日、堺では、自転車・刃物に並び、線香は、地場産業の一つとして、特に、手作りで有名である。手作りなら、自分でも作ることが出来るのではないかと考え、線香作りに取り組むことにした。

Ⅱ　研究方法

[1] 文献で調べたり、資料集め

(1) におい、香料、線香について

[2] 資料集めのため見学

(1) 梅栄堂見学

[3] 自分で線香を作る

Ⅲ　研究内容

[1] におい、香料について

「におい」は、私達に事実が生々しい現実である事を伝え、「香り」は、未知と美の雰囲気を味あわせてくれる。そのにおいが、人類の生活の中に取り入れ出したのは、いつごろかわからないが、とても古い事は、間違いないと思う。目的として考えられるのは、

・宗教的な目的の「におい」－５３８年百済より仏教が伝えられ、仏像・経典とともに香りがわが国に来た。（煙の行方から神秘的な何かを与える。）

・性的な目的の「におい」－体臭を消す事が目的でありにおいにより神に近づきたい願い。

① においの歴史

・奈良時代－遣唐使により香木が持ち込まれる。（唐招提寺創建の鑑真和上もその一人）

・平安時代－貴族たちの<u>香料</u>への関心深まる。（源氏物語の梅ヶ枝の巻、２月10日源氏は香合せを催した。）

↓

１．薫　物　　各種香料を調合した物

２．え衣香　　衣服に香のにおいをしみこませる。

３．香のう　　香を入れたにおい袋とともに残り香をなつかしむ誰袖とよばれる

・鎌倉時代－輸入香料を分類するのに「六国」とよばれる基準があった。

１．伽羅　２．羅国　３．真南蛮　４．真那賀　５．蘇門答刺　６．佐曽羅

・室町時代－香煙の香りそのものを楽しみ遊ぶ日本独特の「香道」にまで達する。

1．合　香　　六国をいかに調合するか。

2．薫物合　　個人・家伝の調合の秘法を生む。

3．組　香　　「香をかく」　「香を聞く」→香道のはじまり

・江戸時代ー香料は化粧料として庶民層にまで普及した。

1．花の露　2．丁子油　3．白粉　4．紅粉　5．伽羅の油

② 香　料

古代の人々は、香木をたき、天に向って立ち上る煙に願いをこめた。化学香料ができるまで古くから天然香料を利用してきた。

●天然香料

1．動物性香料　　じゃこう、霊びょう香、竜ぜん香

2．植物性香料　┌樹皮、材、皮、根、花、葉、果実、種子、（熱帯、亜熱帯に多い）
　　└乾燥した植物は短時間で燃えるので、燃焼しにくいまぜ物を入れた。
　　それを、くん香料、しゅ香料、とよばれる物

●天然香料の種類

1．白檀　ー　インド産のビャクダン科の常葉高木。インド西南海岸に近い、マイソール地方は、白檀地帯といわれ最も有名。

2．丁子　ー　インドネシア、フィリピン、アフリカ東岸に多い。丁子の花のつぼみを乾燥させたもので、通常、丁香と呼ばれる。

3．大茴香ー　インドシナ北部から、中国南部にかけて限られた地域に産出される。モクレン科の常緑樹。

4．桂皮　ー　中国南部ならびにインドシナに野生、または栽培されるクスノキ科の常緑高木。その樹皮をとって乾かした物。

5．麝香　ー　代表的な動物性香料、チベット高原および中国西北部に生息する。

6．竜脳　ー　ボルネオ、スマトラに原産する常緑高木。

7．椨　　ー　九州から中国、台湾、タイなどの温暖地に自主するクスノキ科の常緑高木

8．貝甲　ー　アキ貝蓋、アフリカ地中海沿岸に産する。

9．没薬　ー　先史のころから、文明のさきがけとなった重要な香料の一つ。主にソマリランドに育生する。

10．乳香　ー　オリバナムともいう。これはラテン語で乳汁ということである。

11．シン肉柱ー日本さんの肉柱は南部の温暖地や中国南部インドネシア半島に生育。

12．胡椒　ー　ＢＣ６～５世紀にインド～ペルシアに伝わり、ＢＣ５～４世紀には、ギリシアへ伝わり、貴重薬や香辛料とされた。

③ 堺の線香

大阪湾に臨む堺の名は、摂津・河内・和泉の境に在った所に由来する。背後に奈良・京都そして、外港としての海運が相まって対明南蛮貿易で栄えた。堺は、鎖国をせず、色々な外国と貿易したので「自由都市」と呼ばれた。明船の往来により、堺は交易品だけでなく、すばらしい文化も発展した。当時では、土居川を中心として町がさかえた。

④ 堺線香の言い伝え

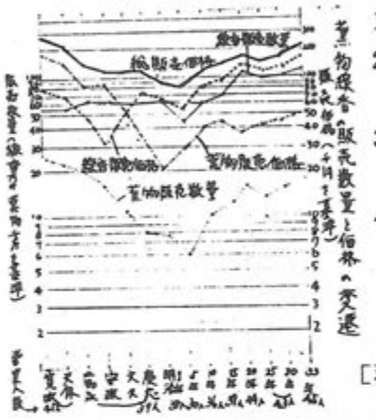
1.享保５年の西川加見の『長崎夜話』に記るされた物が日本での線香記録の初めとなる。

2.延徳年間「堺の人が硬脚香を模造したようである」というのが堺線香の最も古い起源。

3.大正15年「沈香屋の八郎兵衛が線香の製法を伝えた」が、証拠がない。

4.豊臣秀吉が、堺の薬種商を大阪の道修町に強制移転させ、堺に残った薬種商が線香生産の初めとされた。

⑤ 線香の生産



［考察］

1．販売数量から線香が主であったことがわかる。

2．同業者組合が明治になって両者を合体させたのか。薫物から線香へ移り変ったかもしれない。

3．各曲線とも明治元年、５年は全部最低である。これは、明治維新のためではないだろうか。

4．線香販売価格が、他とちがって安政の時最低である。そのことから、堺の線香の製品のねだんと関係があったのではないだろうか。また、中国と日本の線香のちがいがあったかもしれない。

［現況］

・明治維新は、着物から洋服、ちょんまげからざんぎり頭・蒸気機関車など西洋の物が並ぶ。反対に線香は、流行せず、どんどんさびれていった。大正から昭和にかけて少しずつではあるが、伝統工業の一つとして作られるようになった。第２次世界大戦後、堺の町を大きく変えたのは、臨海工業地帯が作られたためである。その中で、手作り線香が今なお堺の町に残っている。しかし、全国生産の６０％が淡路島で作られている。

［2］梅栄堂見学

① 線香作り

1．原料保管　ー　湿気をさける。

2．原料　ー　100 ％輸入（甘松・山奈・丁子・大茴香・ニクズク・安息香・木香・竜脳白檀・沈香・桂皮・日本桂皮・カイコソウ・乳香・麝香　以上１７種）

3．製粉　ー　原料を粉末にする。昔は水車を利用していた。

4．調合　ー　１０数種、染料の原料を独自の処方により一定の量ずつ調合する。
（麝香・伽羅・沈香・竜脳・白檀・丁子・桂皮・大茴香・椨・貝甲）
つなぎには、杉粉、椨。粘着力を増すために、白・黒砂糖を使う。

5．混合ふるい　ー　調合された原料を混合機で均一化させ、更にふるいにかけ、不純物を取り除く。

6．こね　ー　「こね」又は「ねり」という。原料を混合機でこねて、粘土状にした。
粘土状→枕状にした物を「玉」という。→１玉４０kg
６０度位の湯で３０分こねる→ビニルに包み、一晩おく。

7．押出機

◀「玉」を押出機に入れて、油圧で線香状に押し出し、盆板を受けて一定の寸法に切る。

押出機→すらめ
穴72こ

8．生

◀盆板の線香を乾燥板に移しかえながら、曲がり物を省き、まっすぐに整え、並べる。竹のさしのような物を使っていた。この人を「生師」という。

9．胴切

◀用途別の寸法に切り揃える
一日の作業量はかわき板を3～400枚する。

◀回転式の金属包丁

10．乾燥

◀線香の乾燥は、自然乾燥が最適。
夏…4日
春…1週間
冬…10日以上
「しまいごと師」という

◀べかこ
風通しを調節する

11．板よせ　－　生乾きの線香のすきまを防ぎ、曲がりを防ぐ。微妙な曲がりをチェックし切るのは、手作りのよさだ。乾いても10～20％の水分がある。はしは曲がりやすい。（曲がりを防ぐ「さんおとし」）

12．結束

◀線香1本1本確かめながら、一定の重量に結束して曲がりを防ぐ。
・竹のへらで量る（手の感覚でだいたいわかる）
・一日千束ぐらい
・水分12％
・束あげ師（女性が多い）

堺市内線香業者分布図

13．包装　－　製品は1本ずつ検品しながら包装、箱詰する。箱、昔はおり箱、今はおりこみ箱を使っている。製品になるまで1カ月半かかる。

[3] 自作線香

線香工場へ見学に行った時、原料は100％輸入していると聞いた。では、日本にある物を原料にするなら何が適しているか尋ねた。スギの葉は木の中でも香りが良いので香料に良いと教えてもらった。しかし、現在スギの葉線香は日本にないそうだが、私は、いい香りがするスギの葉なら良い線香が作れると思い、原料の一つをスギの葉にした。他の原料を考えている時、祖母から昔、よもぎで線香が作られていた事を聞いた。それで、スギの葉とよもぎを採りに行くことにした。

①原料

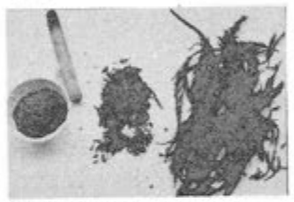
スギの葉→兵庫県峰山高原（峰山高原一帯スギの山ばかりで、疑問に思い、山中を歩いて行く途中、スギの葉線香工場を発見…偶然に驚く）

よもぎ　→香川県観音寺市の祖母宅の近く

②作り方

1．乾燥
照り返しのきついコンクリートの上で乾燥する。

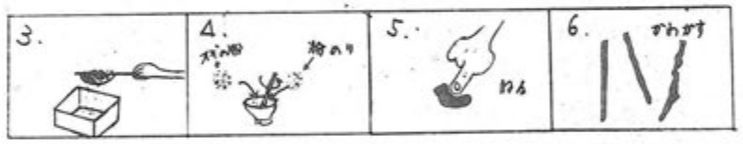
2．



＜スギの葉＞　＜よもぎの葉＞

枝切り→鋏で切る→する　葉→鋏で切る→する

3．茶こしでこす
4．調合
5．こね
6．乾燥



③自作線香実験結果

原料分量	色	ねり具合	燃え方	におい	
スギの粉 4 粉のり 1 湯(60℃) 1	うすい茶色	粉のりとスギ粉と混ぜるとまぜやすいスギの粉、スプン3ばいのときはべトべトになった。少にべトべトくっついて細くしにくかった。	3分間で1cm燃える。普通の線香よりくさい煙が燃えた。じわじわ燃えた。けむりもよく出た。	スギのにおいがする普通の線香とよく似たにおい。	大 大 成 切
スギ粉 4 粉ものり 1 湯(60℃) 1.5	うすいこげ茶色	湯スプン1ばいの時はこねにくくて、作れなかった。しかし、冷し湯を入れるいれると、うまくねる事ができた。	3分間で0.6cm燃える。火のついている時は黒くなりこげながら燃えていた。けむりはよくでた。	スギのにおいはするけむりがくさい。	成 切
スギ粉 4 かたくり粉 1 湯(60℃) 2	茶色に近いこげ茶色。	かたくり粉は先に湯とまぜるとのり状になったので少しスギ粉を入れてまぜた。粉のれは時々ぬけ切れたがねるとねれ、細長くできた。	3分間で0.6cm燃える。1回目火がすぐ消えた。2回目、じわじわと燃えていった。けむりはよくでる。とてもゆっくり燃える	スギのにおいはするけむりがくさい。	成 切
スギ粉 4 かたくり粉 2 湯(60℃) 3	茶色	かたくり粉は、のりかたいけものになった。だから、スプーン2ばいいれるとしかし、ねばねばしてねりにくい	3分間で0.7cm燃える。1回目すぐ消えた。2回目じわじわ燃えていった。けむりはよくでた。	スギのにおいはあまりない。墨にちかいにおい。	成 切
スギ粉 4 水あめ 1	こげ茶色	ねくねくでもろくなべ。しかしねばりベタとくっつく。まるい棒もできなかった。	火がつかない。火をつけるとナイロンがとけていくようになった。	あまいにおいがする	失 敗

よもぎ 8:1 粉のり 8:1 湯(水)8:1	茶緑	のりとよもぎがうまくまざらなかった。 細くできなかったので のばすとの だめ。手が所にくっついてしまった。	火をつけても、すぐに消える 火がつかない やはり、あれた所は黒くなる	よもぎのにおいがする	火 点 敗
よもぎ 8:2 粉のり 8:1 湯(水)8:1	ちょっと黒っぽい 茶緑	うまくまざった。多かったと思う。 今度は、うまくまざった。まっすぐに 細くはできたが、ねれば、細くする ことはできた。	1分間もたずすぐ消える 1回目すぐ消えてしまった。 燃えた後は、ラクラクだった。 煙がスギに比べて少ない。	よもぎのにおいがする	火 点 敗
よもぎ 8:1 メリケン2 8:2.5 湯(水)8:1	白はいすと緑が 入っている	1はい入れた時は、湯が多すぎたの で、メリケン2を入れた。そして、ちょ っとかたいと思って、形を整える時は ゆっくりかわかしてから形をととのえた。	火がすぐに消える 火のついた所は黒くなっている	きょうれつなよもぎのにおいがする	火 点 敗
よもぎ 8:2 のりメリケン 8:1 湯(水)8:1	白っぽい緑色	ちょっとよもぎが多かった。のりメリ粉 が少しなかったのでべとべとだった。	火はすぐに消える。 火のついた所は黒くなっている	ろうれつなよもぎだんごのにおいがした。	火 点 敗

［考察］

スギの葉を粉にするとおがくずのようになり、それをメリケン粉やのりで固めた。木くずなので、よく燃えた。においも線香らしかった。さすが１番香りのいい木だなぁと思った。よもぎの葉を細かくすると、もぐさのようになった。よもぎだけだったら、じわじわと燃えた。しかし、のりやメリケン粉を入れたら、燃えなかったので、よもぎで線香を作っていた時は、何を入れて作っていたのだろう。戦後、何もない時代のことだからきっと天然のものを利用していただろう。

［4］研究結果と結論

自作線香は、スギの葉で作った物がよく燃え線香らしい香りもよく出来た。しかし、売られている線香のように何種類もの原料を混ぜ合わせて作るのは、とても難しい。堺の線香は日本にない原料を１７種類も混ぜ合わせて作られている。線香作りの原料の調合は、非常に微妙で難しく、その店によって違う秘伝がある。特に天然香料ばかり混ぜ合わせて作られた堺線香は、熟練された技術により高級線香として、伝統的な生産を受けついでいる。このように堺が線香作りの発祥地となったのは、対外貿易の拠点として発達したためだろう。しかし、線香にとって香りが命であるため、火をつけてみなければ良い線香なのか悪い線香なのか見分けがつきにくい。白檀のように良い香りを放つ木がなくスギの葉を使っての線香作りであったが、遠い昔にもやはり、スギ以外の日本にある木又は草・花のしるを利用して作られていたのではないかと考える。今は、化学香料などを使い、色々な香りのするものがあるが、やはり天然香料のすばらしさは、香を楽しむという形で今も人々を楽しませている。

［5］参考文献

・「匂い遊びの博物誌」　高橋由明　現代出版
・「円地文子の源氏物語」　円地文子　集英社
・「堺市伝統産業」　堺市経済局
・「香りと文明」　奥田治　講談社
・「わたしたちのまち－堺－」　堺市教育委員会社会科部